

足田雅昭、日高佳紀、日比嘉高編著『スポーツする 文学 1920-30年代の文化詩学』

田代, ゆき
福岡市文学館

<https://doi.org/10.15017/17833>

出版情報：九大日文. 14, pp.97-100, 2009-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

疋田雅昭、日高佳紀、日比嘉高編著

『スポーツする文学』

1920—30年代の文化詩学』

TASHIRO
YUKI
田代 ゆき

スポーツは現在、私たちにとって身近な存在だ。テレビ、ラジオ、新聞、雑誌、インターネット、各種メディアを通じて私たちはスポーツを巡る無数の言説を受容し続けており、意識しないうちにも親しいものとして認識している。例えば、『スポーツする文学』の執筆者たちが、巻末の履歴にそれぞれのスポーツ経験について明かすとき、微笑し、共感を持ち、（たとえ隣に権威ある大学の名が並ぶにしろ）私と変わらないという如き、スポーツを通して共有し得る柔らかな感情の生まれることを感じ取る。「スポーツと言葉が格闘するアリーナへ、ようこそ。」との序言は、そういった読者の心理に無意識であるまい。スポーツの親和性はいかにも自然に、観覧者の席を用意する。既に私の中にも内面化されて在るスポーツとの共振性、その仕組みは早くモダンイズムと大衆文化の時代、論集が対象とした一九二〇～三〇年代に成ったのだという。

論者の多くはそれぞれにとつて近しいスポーツを題材に据

え、論述を開始する。しかし、批評にしる、小説にしる、詩にしる、スポーツを題材とすること自体、始めから当たり前のこととしてあった訳ではない。青木亮人「スケートリンクの沃度丁幾」は山口誓子のスケート連作に、新興俳句へと繋がる形式の新しさを見たが、のみならずスポーツは、新興俳句が好んで用いた題材でもあった。中でも「ラグビー」は誓子が用いて以来、西東三鬼、日野草城、横山白虹をはじめとする新興俳句の俳人が次々に作句したことで知られる。特に白虹の連作は「無季」容認の一事例として引用されて（吉岡禪寺洞「無季の問題等」「天の川」34・5）、新興俳句史上象徴的な句ともなった。既に早く、季語について「私は之の思想を拒否したのである」（「天の川」31・10）と強い口調で自身の立場を表明した白虹の懐疑は、「月と云へば仲秋玲瓏たる明月を想ふと云ふ合言葉の世界が、下凡なる人々はこの様な高尚な世界を知らないでゐると云つた様な優越の心情が錯覚を惹きおこさせる」（「俳句研究」35・10）という俳界の閉鎖性に起因する。新興俳句がスポーツや、昇降機、高層建築、建築場、労働者、ルンペンといったモダン都市の風景を次々と題材に取り込んでいったことは、「合言葉」から脱し、より広い社会へ眼差しを向けようとした意識の転換と無関係でない。

個別のジャンルに限らない。「巨大なビルディング」「昇るエレベーター」とスポーツする女とを一篇の詩（一九三〇年の彼女の風景「風俗雑誌」30・8）に写し込んだ神原泰は、やはり「自動車」「飛行機」「工場」「労働」を写した詩の中で「一九二九

歌にあらわれた過剰な「健康」さを小林は逆説的に「病氣」と表現したが、分り易い言葉の羅列と単純な繰り返しは確かに狂気じみて見える。ただ描写の問題に限らない。易しく明快な言葉は多数の理解と共感とを得るに適してもいただろう。ラジオの前の多数聴衆が、歌を繰り返し見聞し内面化（身体化）していった様を想像することは容易い。（佐野洋「歩け、歩け」「小説寶石」05・1は現代においてそのことを雄弁に、無批判に物語る。）日比嘉高「声の複製技術時代」は、メディアに表象されたオーディエンスの姿が受け手に「鏡像」として映り、巨大な仮想集団を構築したことを言うが、「歩くうた」が読む／聴く者に、その筆致にも等しい、足並みを揃え歩く均一な集団の姿を立ち上げるのは、同様に、表象された「あるく」姿の鏡像として「あるけ」と呼びかけられた聴衆／読者を想起するためだろう。そこに、在るはずの差異や境界は消去され、あらゆる人間が均一に存在するかのような錯覚に陥る。振り返って、転換により「詩作の場所」として新たに出現した「街」には、多様に異質な物が含まれたはずだ。論集が、特権的な主体による硬式野球やゴルフ、硬式テニスのみならず、少年たちの軟式ボール（松村良「ゴムボールを手にした子供たち」、中産階級のベビーゴルフ（天野友幸「時を忘れる愉楽」、学校制度に組み込まれた軟式テニス（日高佳紀「テニス文芸のレトリック」）をも考察の対象としたことは、そのことに矛盾しない。しかし、西村将洋「モダン・スポーツ批評」が神原の言うスポーツする身体の機能（機械）美に、「超階級的」

（村山知義）思考へと繋がる要素を指摘したように、一方では高層ビルと共に搾取される労働者を写し取りながら、「黙々として一歩一歩」歩み行き「喜ばしげに労働し、直接生産に参加し、黙々として凡てを肯定し、握手すること志向するに至って、階級意識は解消されている。そこに「たとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、国民は常に水平的な深い同志愛として心に思い描かれる」（『想像の共同体』）如き共同体の光景を見ることは易しい。

スポーツの表象を巡る共同体的全体化への過程は、本書において、複数の論者により繰り返された主題のひとつである。文学がスポーツの啓蒙を通して国民の内面形成の役割を担ったことを言うて、その荷担をより明確に認めたのは日高氏だが、その上でなお、個別の人間を捉え得た幾篇かの小説が提示される時、均一化された光景に亀裂を生じさせる文学の存在に、可能性を見る思いがする。田中純「羅武君の球歴」はテニスプレーヤー佐藤次郎の死を「日本テニス界を世界に押し出していくための犠牲」として描いて旧来の物語に抗い（日高氏、岡本かの子「渾沌未分」は規格化されない場末のプールで泳がせることで女性の身体を解放し（杉田智美「水際のモダン」、田中栄光「オリンポスの果実」は「あらゆるオルタナティブを無効にした位置」に立つことにより、期待される物語の枠組み自体を拒否するのだという（足田雅昭「スポーツしない文学者」）。太宰治「走れメロス」が熱狂と共同体的一体化に与する物語としてあった一方で、牧野信一「駆ける朝」が「コミユニケーション不可能性」

を描き出すという指摘（西川貴子「わたし」と「わたしたち」の狭間）は、「本来スピーカーの前で孤独であるのだ」という日比氏の認識にも通じる。笹尾佳代「変奏される（身体）」の論じる夢野久作「火星の女」の批評性は、中でも特に強く明確に思われた。しかし一方で、題材とするのが「グロ・エロを織りなした近代の一大猟奇事件」として異常な興味をそそつて居る」（九州日報）³³・10・30付）と新聞に報道された如き、人々の好奇の目にさらされた事件であり少女の身体であったことを思えば、新たな物語もまた大衆による消費に無縁でない。久作の文章が、いかに流布する物語への抗議を含み、個別の物語を提示したのであったにしろ、黒焦死体を以て表象された人見絹枝の身体が、大衆に消費されるもうひとつの新たな物語として存在する可能性もまた、ジレンマの内にも、否定できない。

スポーツと聴衆との間柄にも等しく、文学は読者と無縁に、そのみで成立し得る聖域ではない。読者は、一方的な物語の受け手や表象の対象などでなく、「能動的なオーディエンス」日比氏「期待の地平」（疋田氏）の語を以て表されたように、自ら眼差し、熱狂し、一体化し、「わたしたちの物語」（西川氏）を期待し共有してゆく。序言の言葉に促されて意識的に観衆の場に身を置き、本書を読み進めて見えるのは、過去の言説への批判や糾弾よりむしろ、一観衆である自身が今まさに「わたしたちの物語」の生成に荷担し続けているだろうことへの恐れだ。語って欲しい所を求める心性は私の内に常に在り、そこに現れた言説をより大きなものの表象（代表）として均一な光景のう

ちに収めることを絶えず繰り返している。この認識をたたくには恐らく、本書がスポーツの上に、内面化された物言い、透明化された過程を絶えず可視化し続けたように、あらゆる、言葉による文化的表象の上に、自身差異化を試み続けるしかないのだろう。一冊が「少年倶楽部」（松村氏「テニスファン」（日高氏）「アサヒ・スポーツ」（波瀾剛「スポーツ小説」の盛衰）山岳雑誌（熊谷昭宏「死に至るスポーツを語る」）を始めとする、広範な媒体を考察対象とすることはそれ自体、示唆的でもあった。

時代とキーワードとを極めて限定的に限定して考察された本書の発する問題提起は、個別の問題であると同時に過去の事柄に止まらない。「火星の女」発表の年、一九三六年を回想する小説、大西巨人「雪の日」（群像）⁹⁴・2は、戦後になお行軍し続ける戦死者の亡霊の「次ギノ戦争ノセイダヨ！」（ステイヴン・ヴィンセント・ベナー）という現在性を表す語と共に、「人の真似をするんじゃねえぞ。……ひとりですつと立つてゆけ。」（尾崎士郎）の一節を印象的に引用した。簡潔な主張の未だ困難であることと、重要であることを思う。

本文にタイトルを引用しなかつた論文に、西山康一「（肉体）におびえるとき」、宮蘭美佳「プロレタリア文学とスポーツ」、巻末に「スポーツ文学年表 1914―10」がある。なお論文の副題及び章題は割愛した。